医の中の蛙

連載102

里見清一

イラスト 野村俊夫

人が死ぬのはそんなに嫌か

見える範囲でなければ

昔の葬式では、故人が高齢であれば、その長寿を祝って参列者に強飯（こわめし）（赤飯）が振る舞われたという。落語「子別れ」の熊さんは、90歳を超す長命で亡くなったご隠居の葬式で般若湯（はんにゃとう）（酒）をしたたかに飲んで酔い潰れ、起きた後でこの強飯の弁当を懐に吉原へ繰り込む。年寄りから先に死んでいくのが「めでたい」ことだと、誰も疑問をもたなかった時代の話である。

東大名誉教授の大井玄先生は、死の床の老人のわきで孫たちを遊ばせて、死ぬということがどういうものかを肌で感じさせ、分からせるのが良いとおっしゃっている。「死」は忌むべきものではなく、自然なもの、あるべきものだと理解させることが大事だという趣旨だが、裏を返すと現代では、わざわざ意図的にそうしないと子供たちは死を「学ぶ」ことができないのだろう。

今や死は「自然」どころの話ではなく、見たくないを通り越して「あってはならない」くらいの扱いを受けている。神戸市須磨区で、余命宣告を受けた末期患者とその家族を受け入れ、利用者の希望に添った介護や看護を実費で提供する「看取りの家」なる施設が計画された。余命わずかな患者さんに望ましい最期の場所を提供する、というのだから、まことに結構な話である。

ところが住民の猛反対に遭い、計画は結局頓挫してしまった。住民と事業者がもみあいになり、警察まで出動したというから穏やかではない。事業者側の説明会の申し入れも、住民自治会側は拒否したという。主な反対理由は、「住宅地に死を持ち込むな」ということらしい。ある住民の女性は「必要な施設だが離れた場所につくってほしい。見える範囲でなければあってもいい」と語ったそうだ。

"NIMBY（not in my backyard）"、自分の裏庭には嫌だ、という言葉があるが、これはその最たるものだろう。例によって新聞は、事業者側の手続き的な不備も含めて「中立的」に報道しているが、何を遠慮しているのかと私は思う。これが、裏庭に米軍基地ができてうるさいとか、原発ができて不安だとか、凶悪犯専用の刑務所ができて怖いとかいうのなら分かる。しかし、よりよき死に場所を求めている人に対して、「自分の近所で死んでくれるな」とはなんたる言い草か。

それなら、孤独死しそうな独居老人を近隣から追い出す方がはるかに理にかなっている。死んでから数ヶ月もたって発見されたりすれば後の片づけも大変だ。一方、施設で家族に看取られる病人が、コミュニティにどういう迷惑を及ぼすというのか。ついでに言うと、この「看取りの家」は5人程度を受け入れるそうなので、亡くなるのは週に一人くらいであろう。大きい病院ではどこでも一日一人以上のペースで死亡退院が出ている。それを近隣住民が気にするなんて話は聞いたことがない。

私は癌の医者であるから感覚が違うと言われればそれまでだが、「死を日常的に目にするのはつらい」という住民のコメントには、呆れるばかりである。若い人や子供が事故や犯罪の犠牲になるのを見たくない、というのなら当然で、私だってそうだ。だが、繰り返すが、不治の病に冒された人が安らかに臨終を迎えようと

日本赤十字社医療センター化学療法科部長。本名・國頭英夫。1961年鳥取県生まれ。東京大学医学部卒業後、国立がんセンター中央病院などを経て現職。「超高額薬価」の問題点を鋭く指摘し国を動かした。著書に『偽善の医療』『医学の勝利が国家を滅ぼす』『見送ル』など多数。愛読書はマキアヴェッリの『君主論』。